

文化的背景

● 人間の行動と文化

人間はひとりで生きるのではなく、複数の人びととともに集団で生活し、その集団に特有の文化を発達させている。食事、排泄、入浴、運動、仕事、遊びなど、毎日の活動のほとんどは、個人が自由に選択して行っているように見えるけれども、実際にはその多くが、文化によってかたちづけられている。食事のマナー、排泄の場所、入浴の仕方をとっても、世界にはさまざまな様式が発達している。

同じように、健康、保健、医療も人間の文化のなかでかたちづけられている。「かぜ」をひいてしまった時の経験を考えてみよう。熱が出て、咳もあり、悪寒がするので、病院に行くと、医師から今はやりのかぜだと言われ、薬を処方されたという人や、薬局で市販の薬を買って対処したという人もいるだろう。症状が重くなると、学校や会社を休んで家にいることも期待される。これを「病人役割」と言い、病気の人に期待される行動である。このように、病気のときの行動も、文化的に適切な方法で行われることが期待される。

● 応用医療人類学

応用医療人類学(人類学の研究で明らかになっていることを保健医療行動の領域に応用して行われる学問と実践)では、人間にとっての病気の意味を理解し、病気の予防や治療に役立てるには、人間の行動の背後にある文化に着目することが必要だと考える。つまり、健康も病気も医療も、ある特定の社会のなかで生まれる文化の現象であると考え、その社会の文化的背景に照らして、病気になった時の人間の行動の意味を理解しようとする。その際に、観察やインタビューの資料を使い、(1)健康や病いに対する認識、(2)病いを経験し、それに対処する行動、(3)医療のシステム、(4)治療の効果という4つの側面から、健康、病気、医療の文化的背景を明らかにする¹⁾。

● 応用医療人類学における生活習慣病のとらえ方

生活習慣病を例にして考えてみよう。日本では、がん、心疾患、脳血管疾患、糖尿病、高血圧などの生活習慣病は国民医療費のおよそ3割、死亡数のおよそ6割を占める疾病である(厚生労働省ホームページ 2016年9月閲覧)。慢性疾患には、子宮頸がんや肝臓がんのようにウイルス感染が原因となるものもあるが、「生活習慣病」という名称が示すように、これらの病気には毎日の食生活や運動など生活行動が深くかかわっている。

応用医療人類学では、次の(1)から(4)に述べるような問いを立てて、生活習慣病を考えていく。(1)現代の日本人の生活スタイルにどのような生活習慣病のリスクが潜んでいるのだろうか。(2)一般に、日本社会では、心臓や脳血管障害、高血圧、がん、糖尿病などをどのような病気だと認識し、それがどの程度になると深刻であると考えられるの

うか。(3) 患者個人は自分の身体や症状をいかに認識し、それに対処しているのか。(4) 日本では糖尿病や高血圧を判断し、治療し、その効果を評価するためのどのような医療の仕組みがあるのか。そして、これらの問いを検討する際に、社会一般の認識と生活習慣病を患っている人の認識は異なっているかもしれないと考える。

医学の知識や治療も日々進歩している。医療人類学では、医療者と患者の認識の異なりは、「疾患」と「病い」という概念で説明され、それぞれの語りはそれぞれがよって立つ信念にもとづくひとつの「解釈モデル」として提示される²⁾。臨床現場から社会全体に視野を広げると、日本では現代医学だけではなく、はりやマッサージなど伝統医療も存在する。実際に、多くの社会で医療は多元的である³⁾。

慢性疾患ではセルフケアが重要になり、病院での治療やリハビリテーションに加えて、さまざまなセルフケアが用いられ、同じ病気を経験している自助グループの活動になることもある。自助グループは医療者によって構成される専門セクターとは異なり、一般の人びとによって構成される民間セクターに属している。民間セクターは、ヘルスケアのシステムを構成するもっとも大きな要素である。自助グループでは病いを経験している当事者やその家族が共有する価値観や信念にもとづいた活動を行うが、そこでは、情報を共有し、ともに励ましあい、苦悩を共有することから、「苦悩の共同体」とも呼ばれる⁴⁾。

● 環境とグローバル化

慢性疾患は環境条件による影響を強く受けるので、発症の原因を個人の行動や個人の選択のみに起因させることはできない。経済と文化のグローバル化にともない、世界の生活様式は均質化し、世界各地で慢性疾患が増加している。炭水化物を主体とする食生活や、単糖類や脂肪の摂取量の増加は腸内細菌の多様性に変化をもたらしている。栄養過多も深刻な健康問題であり、慢性疾患につながっている。世界各地で食料が安全、安心に供給されない状態も深刻化している。戦争や紛争や災害などによって住み慣れた土地を追われて生きている人びともいる。現代社会では、文化的背景を考察する際に、個人の健康に及ぼす世界の政治と経済、グローバル化の影響を考慮する必要がある⁵⁾。

文 献

- 1) Kielmann, K.: Introduction to Applied Medical Anthropology, in Principles of Social Research, J. Green and J. Browne eds, pp.135-144, Open University Press, 2005
- 2) Kleinman, A.: The Illness Narratives: Suffering, Healing, and the Human Condition. Basic Books, 1988 江口重幸・五木田紳・上野豪志訳: 病いの語り——慢性の病いをめぐる臨床人類学. 誠信書房, 1996
- 3) 道信良子: 「健康・病気・医療」『文化人類学』第3版, 波平恵美子編著. 医学書院, 2015
- 4) Helman, C.: Culture, Health and Illness (5th ed). Oxford University Press, 2007.
- 5) Singer, M. ed.: A Companion to the Anthropology of Environmental Health. West Sussex: Wiley Blackwell, 2016.

(道信 良子)